

永井隆

亡びぬもの



亡びぬものを

永井 隆

亡びぬものを

昭和二十四年十月五日印刷
昭和二十四年十月十日發行
(再版)

定價貳百圓

著者 永井 隆

発行者 長崎市船津町十四番地
嘉村 國男

印刷者 東京都千代田區神田小川町二ノ一二
小島 順三郎
印刷所 株式会社秀英社

發行所 長崎市船津町十四番地
長崎日日新聞社

電話代表四〇〇〇番
振替長崎四〇〇〇番

發賣元 東京都千代田區神田神保町一ノ五七
蓮見書店

第二部

改宗

一〇一

聖ヴィンセンシオ会

一二五

一 転

一四四

・ 死線

一六一

助教授

一二六

救護班

一三四

白血病

一四六

灰

二六八

後記

二九一

裝
幀
・
日
置
勝
敏

第一部

父と子

「スグカエレ、チチ」

冬休には内職に家庭教師をしている都合で帰省しないことにきめ、故郷の父にもその旨は手紙で出しておいたのだつたが、休みに入つて四日目、この電報を受けとつて、隆吉はびつくりした。何事が起つたのか見当もつかぬながら、すぐその夜の汽車で長崎を發つた。

かねて血圧も高いようだつたから或は腦溢血でも起したのではなからうか？ そればかりが汽車に乗つて十八時間を通して頭の中で渦を卷いていた。

一昨年、母を腦溢血で亡くしてから父ひとり、隆吉の医師免許証をみたら喜んでくれるはずの人であつた。來年の春には長崎の医大を卒業してその免許証がもらえる。それまでは生きていてほしかつた。

山陰線の汽車はことさらにのろかつた。心をまぎらすために歌を作つたりした。

隆吉の村の人々は隆吉が帰省するたびに、なるべく勉強しないで下さいと頼むのであつた。勉強したら偉い医者になる、偉い医者になつたら、こんな山里に歸つて來ないだろう、というわけだつた。

こんな山里に歸るような医者で終つてはならぬ、と隆吉をひそかに励まし続けているのは、その山里の開業医をしている老父だけであつた。出雲の人の考えている孝行とは一生親の墓守をして、親代々

の墓地に我身も埋めて血統を絶やさぬことであつた。隆吉の父は、孝行とは親の意志を發展させることだ、墓は第二だ、どこに葬られたつて同じじやないか、地球が墓だもの、と隆吉に言つたことがある。

林の家系にはそんな氣風があつた。先祖は一品親王より出で、紋どころは一文字三ツ星である。大江広元、毛利元就たちの身体を遺傳質が通過して、どこからか分れ、おちぶれて松江藩の藥草關係りとなり代々仕えていたが、或代の若い男が簸の川上の、おろちの住んでいた鳥上山に藥草採取に出かけ、雲深き山里の娘と恋におち、いさぎよく両刀を捨てて村人になつてしまつた。それから幾代かの墓が横田というところにある。隆吉の祖父の文隆は分家をして上山という村に出て漢法医を業とした彫刻をよくする人で、木彫のほていなど玄人の域に達し、小びようたんに銀のさくらをぞうがんとした氣付けぐすり容器は山住みの人の手すさびとも思えぬほど美しいものだつた。

文隆に一男一女があり、女は大吉寺という山奥の禪寺に嫁し、男は寛といつて、これが隆吉の父であつた。寛はノブルとよぶのだそうだが、誰もヒロシと読んだし、電報はカンだつた。父は何れで呼ばれても返事をした。

隆吉は小学生のときから毎年夏休には伯母さんのいる山寺へ行つて和尚さんから可愛がられ、朝夕の勤行には小僧さんの役を果たした。

なむからたんのうとらやあやあ

と太声でとなえながらうす暗い本堂で木魚をたたくのは好きだつた。この山寺は子供のかんの虫を取るので近隣の村々に有名だつた。農婦がきかん気そうな子供をつれてお参りに來ると、和尚さんは彼等を本堂に坐らせ、しばらくお経を上げた。それから本尊の前にお供えしたお水を下げてきて、それで子供の手をよく洗い、手ぬぐいでよくぬぐつた。

毛筆に墨をつけて、その手のひらにまじないの文字を幾つも重ねて書いた。その文字はみな虫篇だつたが、字引にはない難かしい字で、重ねて書くから終には手のひらは眞黒になつた。書きながら何か呪文をとなえ、書き終るや大かつ一声かんの虫に引導を渡した。さあ見てござらつしやい、虫が出てくるぞ、と和尚さんが言うので子供も母親も目を皿のようして手を見ていた。

そうら出た、中指に、と和尚さんが言つた。見るとなるほど出て來た。中指の頭に白い五ミリくらいの長さの髪すじより細い虫がとび出して、ゆらりゆらりと身をくねらしていた。

そうらまた出た、人差指に、ほら今度はべにつけ指だ。和尚さんが言う通り、によきによぎと虫が指の頭に突立つてゆらいだ。こんな虫がおるけん坊がやんちやを言うのじやな。さあ和尚さんが虫を退治てやるから、今日からはやんちやを言わんのだぞよ。和尚さんはいねいにその白い虫を指でつまんではひねり殺した。母と子は大喜びで、しばらく本尊さまに御礼の祈をして歸つていつた。

隆吉はこの神祕に感心したものだつた。ところが医科の学生となるに及んで、かんの虫などというものが指から取れるわけがないと知つた。そこで実験を試してみた。まじないは知らなかつたから、ま

ず手をよく水で洗い、手ぬぐいでよくぬぐい、しばらく見ながら待つていると、出て来たのはまぎれもないあの山寺のかんの虫だつた。取つて顕微鏡でみたら繊維だつた。こんどは手を水で洗つただけで乾してみた。すると虫は出て来ないことがわかつた。だから問題は手ぬぐいでよくぬぐう処にあるわけだ。手ぬぐいで手をよくぬぐつてから、よく見ると、木綿の繊維がすり切れて手にくつついていた。顕微鏡でみたらさつきのかんの虫と同じだつた。つまり水で洗つてぬれた指の頭に木綿の繊維がすりきれてくつつき、水が乾く一方、繊維は水を吸つてびんと立つから一端が指から離れ、顔を近づけて見つめてゐる母親や子供の鼻息で、ゆらりゆらりと身をくねらせて生物のごとく見せるのであつた。それだからと言つて和尚さんがペテンをやつてゐるとは申されない。なぜなら和尚さんは先代から祕傳を受継いだとき以來、それはかんの虫だと信じこんでゐるからであつた。

父の寛という人は子供の時は手に負えぬいたずら者で村の小学校を退学させられ、隣村の小学校へ転校してまた退学させられ、次々と近隣の小学校七つをことごとく退学させられて、ついに卒業出来なかつた。

文隆は村の小学校の教員を我家に下宿させて寛の家庭教師に頼んだが、寛はどこからか字引を手に入れていてそれで勉強をし、かえつて先生をぎゆうぎゆういじめたので、今度は先生の方が逃げてしまつた。その後寛は農業に従つていたが、二十才のとき、何事かあつたのか心機一転し、こんな山の中で一生土いじりで暮しては大ばか者だ、今から勉強して親の代をつぐ医者になろうと奮発し、志成

らざれば再び歸るまいと村はずれの道祖神に誓い、故郷をとび出した。先ず医者 of 玄關番になり、次に書生となり、松江の田野ドクトルに従つて晝も夜も仕事のひまひまに先生の藏書を筆写して勉強をつゞけ、五年ののち、二十五才で前期後期二つの国家試験に同時に合格して開業医の免許証を得たのである。同年に二期共に合格した者はその年わずかに全国で二名だつたという。

免許証をもつて上山の文隆のもとに歸つて、始めて勘当を許してもらつた。それから松江の田野病院の代診となり、足輕の娘を妻に迎えた。妻はツネといい、安田氏である。小学校を出ると、茶道と生花の師匠をしていた。翌年立春の日に長男が生れた。それが隆吉である。

隆吉の生れた秋、簸の川ぞいの飯石村から招かれて寛はその農村に開業した。その村は文隆の住む上山から三里ばかり川下にあつた。親の墓を残して移動する家風はここに見られるのである。

村の開業医夫婦は学匠がなかつたが、二人とも実によく勉強を續けて生涯やまなかつた。ツネは夫について医学と語学を勉強して、のちには立派な代診となり、手術などは夫より器用だつたから、わざわざ奥さんに診てもらいたいと言つてくる患者もあつた。ドイツ語もラテン語も隆吉よりよく覺えていた。しかし寛は医師会長になつたりして正規の学匠をもたねばならぬことをしみじみ感じたとき、隆吉には出来るだけ長く大学に残つてよい研究をしておくれといつて頼んでいた。

その父が突然電報を打つて呼び返したのは何の用件であらうか？ 隆吉が簸上線の終点木次駅で長

旅の汽車を降りたころには、冬陽はすでに山に落ちようとしていた。昨日ごろ降つたとみえる白雪が浅く畠などを被つていて、うそさむい風物だつた。故郷の村にはいると目に触れるものごとく、懐かしく中学生のころと少しも変らぬ風景にふと心が動いて隆吉は、

桑のまの雪に残れる足跡は菜を食いに來し兎なるべし

と一首ものした。寒い宵だつたから途中誰にも会わず、不安を抱いたまゝ我家にたどり着いた。

我家はひっそり静まり返り、別に大事件の起つた気配も感じられなかつた。何よりもうれしかつたことには診察室に灯がついていて、カーテンに父の長い横顔が患者と向い合つて映つていた。その影は元氣そうな声で話している。まだ肺炎にはなつておりませんよ、などと言う声は少し老人めいてしわがれてはいたが、力がこもつていた。隆吉は元氣よく表戸を引あけて「ただいまッ」と叫んだ。

父はなぜだか機嫌がよくなかつた。電報を、と言いかけたら、居間で待つておいで、診察がすんだら行くから、とそつけなく言つた。隆吉は茶の間のこたつに足を突つ込んで小学生の頃学校から帰つてくると、よくしたように、疊の上に仰向けになつた。昔からある大時計が、昔のままのテンポで振子を振つていた。

見知らぬ看護婦が來て、ていねいに作法通りのお礼をし「若先生、お帰り遊ばせ」と言つて、もなか二つを木皿に盛つたのとお茶を差出した。

「やあ、お世話になるよ」と隆吉はあいさつしたものの、内心甚だ面白くなかつた。母ならば、そ

そくさと障子をあけ

「あらお帰り。何だね隆ちゃん、鼻の頭が眞黒じやないの。さあ、一風呂浴びておいで。その間に御馳走出しておくから。お酒がいい？ ビール？ 寒いから卵酒つくつて上げようか？ 隆ちゃんの好きな柿もちやんと取つてあるのよ。まあボタンが一つ落ちかけてるわ」などと言つてくれるところである。なぜお母さんは急いで死んだんだ？ と隆吉はさみしく、独り腹を立てて二つのもなかをひとつかみにして口に入れた。

しばらくしてから父が入つて來た。おお冷える、と言ひ言ひこたつに坐り両手を深く中に差込んであごをこたつの上に載せ、下から見上げるようにして隆吉に向つた。父は氣輕には口を開かず、幾度かためらつては言葉が出ず、そのうちに次第に充奮して赤くなつた。それを強いて抑えてようやく口を切つた。

「隆吉。あんたは金で身売りをするのか？」隆吉はぽかんとした。身売り？——金で身売りとは一体何のことだろう。

「お父さん。そんは何のことです？」

「白ばくれなさんな。あんたは大学生だからお父さんは何も言わん。何も言わんが、いくら貧乏したつて男一匹金で売られますかい？」

父はぼろぼろ涙を流して怒つていた。隆吉は眉をしかめ首をひねつて考えたが父の言葉の意味がわ

からなかつた。

「詳しいことをおつしやつて下さい」

「言う必要はない。——結婚の相手を選ぶのは、そりやあんたの自由だ。しかし、いくら何でも金を目当てに養子にゆくなんて——」

えッ、養子？ 私が？」隆吉はびつくりした。

「これは何だッ！」父は堪りかねて怒鳴り、手文庫から一枚の名刺をつかみ出し隆吉の前にたたきつけた。その名刺の文字は

「木村眞二」

「村田大吉」

あッ、と隆吉は叫んだ。

「覚えがあるでしょう？」と父は鋭く突いた。

「この二人が、ここへ來られたのですか？」

「一昨日來られた。隆吉さんの了解を得て、正式に縁組の申込み來られた」

「……」

「隆吉さんを養子に頂きたい。卒業したらすぐ洋行させ、一生好きな研究をさせる。お父さんもいつしよに長崎へ引取り、魚でも釣つて安樂に余生を送つて頂こう。本人同志は好き合つてゐる仲だから」

ら……」

「お父さん、お父さん、それは話が遠いします。私は村田さんの別荘へ木村先生から招かれて一度行つたきりです。それから今日まで私には何の交渉もありません」

父は無言で隆吉の目の中を見つめていた。隆吉はあの満洲事変の始まつた号外の出た日の浩然の場面をつぎ／＼想出して、考え直して見た。

耳鼻咽喉科の先生である木村教授に誘われるまゝ、隆吉はその日茂木に行つた。長崎商工会議所の副会頭で、百万長者といわれている村田大吉氏の別荘を訪れたのである、そこで夫人や一人娘の登志子のわけのわからないほどの歓待を受けた。秋光にまみれ立つ雲仙をあおいで茂木湾に糸をたれたり親分肌の大吉と意氣投合して大酒をあふり浜節をうなつたり、お茶や歌の素質をちよつぱり示して仰天させたり、二日間にわたり馬鹿さわぎをやつてのけたことがあるのだ。

「ははあ！ あれは見合いだつたのか！」隆吉はひとり感嘆した。そして最後のどじようすくいの場合を想出すや、思わず、

「あはゝゝゝ、あはゝゝゝ」と笑つた。

父はきよんとんとして相変らず息子の顔をにらんでいた。隆吉はまた想出して笑つた。

「何がおかしいツ」と父はしかつた。

「しかし、おかしいですよ、お父さん。見合いにどうしようすくいを踊る者がありますか？ あはゝゝゝ。何のその百万石もアラエツサツサアだ」

父の怒を解くのに苦勞はいらなかった。ありのままを話せばよいのである。父は「馬鹿だねえ、大學生のくせに、氣がつかなくつたのかい」と度々同じことを言つては耳をかたむけ、あはゝゝゝと隆吉以上に高らかに笑つた。

「それで、お父さんはお二人に何と返事なさいました？」

「へん」父は咳ばらいをして言つた。「はばかりながら林寛、貧乏はしておりますが、息子に金に替えて安樂をむさぼるほど落ちぶれてはおりませぬ」

「ありがとう、お父さん」隆吉は叫んだ。

父と子と涙を流して手を握りあつた。父の手はこれまで幾千幾万の脈を握つた手であり、子の手はこれから幾千幾万の脈を握る手である。しかしどちらの手も金には縁のない手であつた。